

陽乃日記

ルコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

陽乃と八幡のほのぼの日記。

もつと素直に

もつと陽気に

陽乃はもつと素敵になれる。

目次

アルコールはフレーバーと共に	1
香りのコンフォート	27
彩りのハーモニー	44
夕暮れに隠れるテレパシー	66
冷たく暖かなフラーレン	94
これからのドラマチック	119
彩りラブソティ	129

アルコールはフレーバーと共に

??彼は静かに煙草を啜える??

いつだったか、あの子が私に向かってこう言った。

“ずるいですか？

本物が欲しくて

本音から逃げることは”

あまりに甘く、子供じみた事を言うから、それまで抱いていた私の彼への印象が全て崩れ落ちた。

春風にふわりと浮かぶ彼の髪は優しく揺れ、見え隠れする潤んだ瞳からはいつもの強気な姿勢はつゆほど感じられない。

キミじゃないみたい。

私の興味を唆るのは、そんなキミじゃないんだよ。

その時から、私の興味は完全に消え失せた。

ガラガラと音を鳴らして。

“…残念だなあ。キミには期待してただけけど”

その時の私の目は、誰に向けるものよりも冷たい視線だっただろう。

もう、会う事もない。

私のおもちやが一つ無くなっただけ。

“…っ”

彼は私に何かを言い掛けたが、そつと口を閉じて黙り込む。

…何も言い返さないんだね。

これで本当にサヨナラだ。

メリットとデメリットでしか人の良し悪しを評価しない私にとって、彼に付いた落第を表す大きなバツテンはお別れを意味する。

それなのに、心のどこかに小さな隙間が空いたような気がしてしまうのはなぜだろう。

沢山のおもちやが一つ無くなったただけなのに。

“……じゃあね、比企谷くん”

……☆

大学の研究室で迎える昼下がりに。

窓から差し込む日差しが暖かさに気を緩まされたのか、私ともあろう者が研究室のソ

ファーで軽くうたた寝をしてしまったようだ。

自席で電源が入れっぱなしとなっているPCはスリープモードとなり画面を黒く映し出す。

「…っんー」

大きく腕を上へ上げ、キュツと背筋を伸ばすと新鮮な空気が身体中に充満した。

可愛いおへそが見え隠れしているけど、残念ながらこの部屋には私以外の学生は居ない。

窓から外を見渡すも、ビルの隙間からしか顔を覗かせない青い空が虚しく私を見つめ返すだけ。

気分が落ちている。

懐かしい夢を見てしまったから。

「…はあ。論文の続きやらなきや」

頭をクリアにするように、私はPCデスクに向かいスリープモードを解放するためにEnterキーを叩く。

小粋な音を立てて弾かれたソレは、命令に背くこと無くうたた寝をする前まで起動していたソフトを立ち上げた。

大学4回生の6月、周りの学生が就職活動に勤しむ中で呑気に卒業論文の作成に時間を割けるのは私を含めて数名もいないだろう。

私の人生は生まれた時から決まっている。

良家の元で丁寧で育てられ、手の掛かる可愛い妹に構いながら明るく育った私は父の会社に跡取りとして入社することが決まっているから。

「…楽な人生じゃない。お金も名誉も顔も、全てがチート級なんだから」

自虐がふわりと研究室に浮かび上がる。

……自虐？

自慢でしょ……。

……はあ。

と、私のため息が運気を逃してしまったのか、一人で占領していた研究室にノックの音が響き渡った。

「やあ、やつぱり居たんだね。陽乃さん」

「あら、丸岡くん」

緩いパーマと茶髪を頭に乗せた男の子が扉から顔を覗かせる。
嫌らしく嵌められた小指の指輪がこの男の底を主張しているようだ。

「陽乃さん、もう卒論作ってんの？」

「まねー。丸岡くんも？」

「いや、俺はココに来れば陽乃さんが居るかなあつて思つてさ」

居るかなあつて……、鍵の貸し出した記録を見りや直ぐに分かるでしょ。

本当に、同じゼミにこいつが居ることに腹が立つ。

研究室の扉をノックする所がうざったいわ。

蹴り破つてこいつての。

「今夜は暇？良いバーを知ってるんだけど一緒にどう？」

女々しく伸びた髪が腹立たしい。

私の逆鱗をヤスリで逆撫でするこいつの態度に、私は思わず毒を吐いてしまっただ。
だ。

……でも、それを理性が押し止める。

「……そだねー。あまり遅くは無理だけど」

こいつのことは無下に出来ない。

父の会社の取引先の息子であるから。

そんな理由さえ無ければ人生の奈落に突き落とされているところだけど。

丸岡との付き合いは将来に必ず役立つから。

「わかった。それならまた迎えに来るから」

ニコッと笑いその場を後にする丸岡を見送り、私は先ほどよりも深いため息を吐く。

羨ましいよ雪乃ちゃん。

私もほんの少しの自由が欲しい。

我儘を言える立場が。

窮地を助けてくれる大切な人が……。

何度目かのため息を吐いた後、私はPCの電源を消し、資料を鞆に仕舞う。

私は彼女達と違うんだ。

黙って下を向けば手を差し伸ばしてくれる彼が居る彼女とは。

何も出来ないのに心の本音を彼にさらけ出せる彼女とは。

……私は違う。

……

……

……

……

……

「それじゃあ、乾杯」

「かんぱーい」

銀座の一角に構える静かなバーは、学生にも良く知れ渡る人気なバーだ。

良いバーってココかい。

って突っ込むのはマスターに悪いか。

敷居も値段もそれほど高くないものの、出されるバーは彩り豊かで名工な物ばかりである。

今まで来たことはなかったけど、居心地の良さと緩やかに流れるジャズが暖かい。

「おいしいね。陽乃さんはどのカクテルが好き？」

……君が隣に居なければどれだけ気を許せたことか。

「あんまりカクテルって飲まないの。丸岡くんが飲んでる物はどんな味なの？」

なんて、当たり前障りの無い返答でその場をやり過ぐす。

白い髭を生やしたマスターはお客にあまり干渉しようとしないうで、どこを見つめるわけでもなく視線を動かさない。

ふわりと。

どこか懐かしい太陽の香り。

それと同時に、ニコチンを含んだ白い煙が私と丸岡くんの前を素通りしていく。

その煙の出し主はカウンター席の端っこに座り、コクリと生ビールが注がれたグラスを傾けていた。

黒いフレームのメガネが顔の半分程を隠している。

カツコいい大人だなあ……。

……。

その人を見つめてしまっていたことが悪かったのだろう。
丸岡は何を勘違いしたか、彼に向かって話しかけていた。

「あの、煙がこっちまで来てるんですけど」

「……ああ、悪い。気をつけるよ」

気をつけるよ、と言ったそばから新たな煙草を啜え直す。

しなやかに煙草を挟む指には何の装飾も嵌められておらず、どこか清潔で温和な
……、優しい印象を抱かせた。

「……変な奴。……ごめんね、陽乃さん。あんな奴が居たんじゃ落ち着いて飲めないよね」

少し大き目に発声されたその言葉は、少々の棘を煙草の彼に向けるように。

「場所、変えようか」

「……先に帰ってて」

「え？」

「先に帰っててって言ったの」

「ど、どうしたの？陽乃さん」

「……外に迎えが来てるの。男の人と夜遊びしてたなんてバレたらお母さんに怒られちゃう」

「え、本当？」

扉の外に慌てて視線を移す丸岡の耳元に、私はそつと顔を近づけ囁いた。

「うん。……だから、この続きは……。今度ね」

その後、どこか身体を舐め回すような下品な視線を送られつつ、丸岡は陽気にその場を去っていった。

バカで扱いやすいけど、彼の相手は私を非常に疲れさせる。

それでも、予定通りに退散させることが出来たのだから気を取り直そう。

「マスター、私にもビールを」

長年の勤か、それを注文されると分かっていたかのように、マスターの手によってグラスには手早くビールが注がれていく。

そして、その泡が縁にたどり着いたグラスが煙草の彼の隣にそつと置かれた。

やり手なマスターだこと。

「隣、良いですか？」

「……う？まあ、別に……」

心の底から温めてくれるような静かな声が、私の思い出を駆け巡る。

やっぱり、懐かしい……。

「ココには良く来られるんですか？」

「……偶に。つうか……」

「？」

彼は私に顔を向けることもなく、また新たな煙草を啜えて火を付けた。

煙草の先から登る煙は空調によるものか、それとも彼が気を使つてか、私の元には漂わない。

一つ、煙を吸い出すと、彼は灰皿にソレを置きメガネをそつと外した。

見覚えのある横顔が、思い出の中からいくつも溢れる。

そして、彼は小さく私に呟くのだ。

「何してんすか？雪ノ下さん」

??揺れる心に手を伸ばす??

泡の残る口元を指で拭き取りながら、相変わらずの瞳を身に付けた彼が目の前に現れた。

途端に身体が強張るのを感じるが、私は直ぐに“いつもの私”を貼り付ける。

太陽の香りは彼が原因か。

ほのかに感じた懐かしさの香りに、ドキドキとする動機が静まらないのなぜだろう。

「…久しぶりだね、比企谷くん」

「そうですね」

「少し、声が低くなつたんじゃない？」

「自分では分かりませんが…」

コトン、とグラスが置かれると、彼はカウンターに置いていた眼鏡をケースに仕舞いバッグに入れた。

「眼鏡…。掛けてなかったよね？」

「大学の講義室は広すぎるんですよ」

…大学に通ってるんだ。

と、そんなことも知らないのかと言われてもおかしくないほどに、私は彼のことを知らないのだ。

それも当然か。

あの日、雪乃ちゃん達の卒業の日に、私は彼を拒絶したのだから。

「さつきは連れがごめんね。気分悪くした？」

「してないですよ。ただ…」

「…う…ただ？」

彼は私に見向きもしない。

ココで出会ったことは偶然にすぎないものだが、ココで彼に言われた言葉は必然だった。

それほどまでに、彼に言われた言葉は確信を突かれていたんだ。

「……つまらなくなりましたね。雪ノ下さん」
「っ！」

ガタンっ。

と、私は思わずその場から立ち上がってしまった。

“いつもの私”は剥がれ落ちている。

動揺を隠せない瞳がバーの店内を泳いでいた。

つまらない？

この私が？

それはあの日に彼へ言った事への意趣返しか。

それとも先ほどの私を見た彼の本音か。

そんなことを考えられないくらいに、彼の言葉は私を動揺させた。

「……。帰る。じゃあね」

「……」

慌ててダウンと鞆を小脇に抱える姿は、どれだけ惨めであっただろう。

それさえも彼の視界には入ることはなく、ただただ煙草を啜えてグラスを持ち上げるだけ。

慌てていたのがいけなかった。

椅子の背もたれに引っかけかけた鞆が宙で逆さになり、中に入れていた物が全て落とされる。

惨めだ。

惨めすぎる。

「……っ」

すると、煙草を吸っていた彼が自らの足下に落ちた一枚の資料を拾い上げた。

「…遺伝子組み換えによる花色の生成……。卒業研究…」

「…返して」

彼はその資料と私を見比べると、腑に落ちぬ様子でそれを私に返す。

「…意外ですね。もっとコテコテな卒業研究をしているのかと思いました」

「……っ」

「遺伝子…。雪ノ下さんが本当にやりたいことってソレなんじゃないですか？」

「…何も知らない癖に、知ったような事を言わないでくれるかな」

「……今のあなたは出会った頃の雪ノ下を見てるようですよ」

「うるさい！」

「本音を、隠すのはズルいんじゃないですか？」

「っ…」

このバーで会って数分、彼は私の何を理解したと言うのだろう。

先ほどから私の心の柔らかい所を突くように、彼は冷めた目で私を見続けた。

「……。不自由さも自由に代えていた雪ノ下さんは…、格好良かったんですけどね」

キミが私の何を知っているの？

雪ノ下家の長女に産まれた私を。

自由に振る舞う妹を持った私を。

比企谷くんは救ってくれなかったじゃない。

「……私も、もういい大人だよ？好きな事ばかりをして生きていけないの」

「親の手元を離れるまで、子供は子供のままですよ」

「それなら、私はいつまで経っても子供だね」

そんな私を見て、彼は煙を口から吐きながら立ち上がる。

背も、大きくなったんだね。

高校生の頃は同じくらいだった身長も、今は彼の方が少し高い。

「我儘をココでくらい言ってみては？あいにく、俺もマスターも友人は少ない方ですか
ら広まる心配はありませんよ？」

指に挟んだ煙草は煙をゆらゆらと。

友人なんて、キミには居ないじゃない。

「…キミの言う通り。私はずっとずっと我儘でありたい。我を通して好きに振舞いたい」

「…はい」

「やりたい事が…、あるの」

そつと、彼は優しくソレを受け止めてくれるはずだ。

だから、お母さんにもお父さんにも言わなかった事を伝えることができる。

「私…、お花屋さんになりたいの！」

「…!？」

「お嫁さんにもなりたい!!っ、娘と、…っ、お花を飾って素敵なお店を作りたい!!」

香りのコンフォート

??四つ葉のクローバー??

ボードゲームでサイコロを振って駒を進めるように、人生の行く末とはあまりにギャンブルで行き当たりばつかりなものだ。

試験があれば合格と不合格があり、愛を知れば純愛と失恋がある。

ただ、私の歩く人生においてはその常識が存在しない。

親の決めたレール…、なんて言うのは少し古いか。

もう少し柔らかく言うのなら、親の吊るした期待に応え続けることで正しい道を歩き進む。

そう、私ならね。

でも、案外人生の主軸は簡単な外力によって倒れるものだ。

あの日

彼と再会したバーで、私のプライドは脆くも崩れ去り、散らばったソレを、彼は丁寧に組み換え直したのだ。

漏れた本音や荒げた声が、今思い出すだけでも恥ずかしい。

「…お花が嫌いな女の子なんて居ないんだよ」

誰かに向けて呟いたわけではない。

その言葉が、ゆつくりと降下し机の上に落ちていった。

まだ寝ぼけてるのかな。

朝食のトーストと一緒に淹れたコーヒーは既に冷めていたが、寝ぼけた頭を起こすために無理やり口に含む。

「……が」

初夏の早朝、なぜか甘過ぎるくらいのコーヒーが飲みたくなる純粹無垢な花乙女。

・

…

…

.....

学生たるや勉強が仕事。

そんな風に考えている大学生がどれだけ居るのだろう。

構内のキャンパスには夏休みを目前にして浮かれる学生がチラホラと見受けられる。

私も、もつと普通に物事を考えることができたら……、なんて考えるのは私らしくないか。

ふと、下に目を落とすとコンクリートの脇から精一杯に伸びようとするクローバーの小葉を見つけた。

三つ葉が所狭しと身を寄せ合う中で、5秒の間に四つ葉のクローバーを見つけられたら彼に電話をしよう。

……あはは、なんか馬鹿みたい。

変な運命に左右されようと、一生懸命に目を大きく開ける自分が馬鹿らしい。

「……そう簡単には見つからないよね」

そつと、私の視線を遮るように腕が三つ葉のクローバー達に伸びる。

そつと、摘まれたその指には、四方へ綺麗に散らばる四つ葉のクローバー。

「…俺、四つ葉のクローバーを探すの上手なんですよ」

「つ、ひ、比企谷くん？…なんで、キミが…？」

四つ葉のクローバーは三つ葉のクローバーの数に対しておよそ0.01%しかない。

それをいとも容易く見つけ出した彼は、白いシャツに黒のスラックスとラフな格好をしていた。

「…この前、雪ノ下さんが落とした卒論に大学名が書いてあったので」

「…私に会いに来たの？」

「はい」

「っ。…そ、そうなんだ」

気丈に振る舞おうとすればするほどボロが出る。

先ほど摘まれた四つ葉のクローバーを彼は何も言わずに私へと渡すと、ソレを受け取ったことに満足したのか目を細めて話し始めた。

「話の続きをしましょうか」

「話しの、続き？」

「はい。お花屋さんになりたいんでしょ？」

「っ！…あまり大きな声で言わないでくれるかな？」

「すみません。…あの時は少し面食らってしまいましたよ。まさか、あの雪ノ下さんがお花屋さんだなんて」

「…ふん。いいでしょ？別に…。私にだって女の子としての一面があるってことなの」

「…それじゃあ、お花屋さんに行きましようか」

「…え？」

「知り合いの花屋が近くにあるんです。今日はそこへ連れていくためにココへ来ました」

初夏の日差しが眩しく照らす。

その暑さたるや、私の顔を赤く染め上げるほどだ。

再会して数日、思えば昔から彼とは良い思い出がない。

それにも関わらず、彼が話す一言が、彼による動作が、彼の持つ物腰が、私の記憶から離れない。

どうして…。

どうして今頃になって。

そんなに優しくするの？

「…連れていって。…私、行ってみたい」

「はい。行きましょうか」

彼に貰った四つ葉のクローバー。

お花が好きな私にとって、それは特別な意味を持つ。

花言葉

B e m i n e .

私のものになってください。

??花の香りがミツバチを??

見覚えのある大通りから一本外れ、迷路に飛び込んだかのような高揚感を覚えつつも、迷わぬように彼の背中を追い続ける。

今朝、苦いコーヒーを飲んでいた自分に、講義をサボって彼とお花屋さんへ行くことなど想像出来ただろうか。

「この路地は近道なんです」

「へえ。随分と詳しいんだね」

比企谷くんの言う通り、曲がりくねった大通りに対してこの路地は比較的真っ直ぐに進めている。

「キミの言うお花屋さんって、この路地の先にあるの？」

「はい。客入りは悪いですけど陽当たりは良好ですよ」

「…」

路地裏の陰りに萎びたこの場所で、本当に陽当たり良好なお花屋さんがあるのだろうか。

先ほどから太陽はビルに隠れて顔を出さない。

それにも関わらず、甘い香りが風上から飛んでくるのは気のせいか。

「ん。着きましたよ」

ふと、強く眩しい光が地面に跳ね返る。

可愛いく尖る三角屋根と、店内を露わにする大きな窓。

お花が悠々と並ぶレイアウトにはミツバチがおびき寄せられるように甘い香り。

そして、愛らしい木造りの立て看板には柔らかい文字がゆるりと書かれていた。

【フラワーショップ お餅】

……お餅!?

「お餅が好きなんでお店の名前にしたらいいですよ」

「す、好きだからって……」

彩り鮮やかに飾られる花束の中に、彼は遠慮無く足を踏み入れる。

店内は初夏にしては寒いくらいに涼しい。

ガラスのショーケースの中には大きなプリムラやフクシアが飾られ、色の柔軟さが醸し出す雰囲気は私の心を驚掴みにした。

「……綺麗」

水々しい花卉は光の反射に伴い白く輝く。

触れれば壊れてしまいそうな儚さが、この幻想の主役へと生まれ変わり、私を取り巻く不自由が嘘のように消え去った。

「これも、これも、…全部綺麗！すごいよ比企谷くん！こつちにもお花が沢山あるよ！」

「店内は走っちゃいけない」

「あ！ガーベラ！」

「走っちゃだめですって」

「あれ?! お店の奥にお庭があるよ！」

「走っちゃ……」

右も左も幸せな花。

私はそれに群がるミツバチのようだ。

ふと、花瓶の水を変えている店員さんが大騒ぎする私を見てニコニコと笑っていることに気が付いた。

あらやだ、恥ずかしい。

腰まで掛かる髪をポニーテールにし、腰に巻いたピンクのエプロンが可愛らしい人。店長さんだろうか。

「あ、騒いじゃってすみません」

「ふふ。いいのよ。育てた娘達が褒められているようで嬉しいわ」
「すごく綺麗です。お花が歌ってます」

「あら、面白い事を言うのね」

面白い事を言ったかな？

きつと、こんなに素敵なお花を世話する彼女も素敵なお人なのだろう。

「あ、そういうえはお餅が好きなんですよね」

「……それは比企谷くんが言ったの？」

「ん？はい。お店の名前にするほどお餅が好きなんだって」

「……ふふふ。ゆっくりしていつてね。……」

彼女はゆつたりとその場を後にする。

何故だろう。

顔は笑顔なのに笑っていない。

「へへ、何か買って帰ろうかなあ。あ、これも可愛いなあ」

足元には背の低いアネモネが。

私は膝を曲げて座り、ピンクのアネモネの花弁を突く。

このコを買って帰ろうか。

お部屋に飾ったらきつと良いアクセントになる。

「……それ、買うんですか？」

「ふふ。可愛いでしょ？…私、ピンクのお花が好きなの」

後ろから掛けられる彼の声へ素直に返す。

「そうですか。連れてきた甲斐がありましたよ」

「…こういうのは雪乃ちゃんの方が似合うかな」

「それでもないですよ。素直にはしゃぐ雪ノ下さんは見てて面白いです」
「うん。…やっぱり比企谷くんは優しいね」

ピンクのアネモネと、彼用の青いアネモネを手に抱え、私は恥じらいもなく彼に笑い掛けた。

素直に。

笑い掛けていた。

私は優しくされることに慣れていない。

だから彼の優しさに、偽ることもなく顔を赤くさせてしまう。

「……………あ、ありが……………ん？」

「？」

「比企谷くん、ほっぺが真っ赤…」

「……………店長に殴られました」

「え!？」

「恥ずかしいからお餅の事は言わないでって……」

「…あ、あはは」

……お餅、私もすきだけどなあ。

彩りのハーモニー

??真つ赤なアールグレイ??

読んで字のごとく【喫茶店】とは、喫煙をしながらお茶を飲むお店である。

そう眩きながら、私の前で煙草を啣えてコーヒを啜る彼は満足気に煙を吐き出す。

お砂糖をこれでもかと混ぜたその黒い何かを、コーヒと呼ぶには失礼ではなからうか。

腕時計の針がゆっくりと進む。

幸せな一時。

「…うん、上手い。煙草とコーヒー…、最強ですね」

「比企谷くん、それ絶対に身体壊すよ。…あと、喫茶店の喫煙は意味じゃないからね」

「え!?!」

「お菓子を食べながらお茶を飲むことを喫茶って言うんだよ」

「へえ。だから頼んでもないのにクッキーとか出てくるんですね。てつきり店員さんの優しさかと思ってましたよ」

それでも煙草を吸い続ける彼を見つめながら、お茶受けとして出されたクッキーをひと齧りする。

最近知ったことだが、比企谷くんの大学は私の大学から近いらしく、さらに彼の一人暮らし先もこの近くだとか。

それもあつてか、最近ではほとんど毎日のようにLINEをしては一緒にお茶を飲み、お酒を飲み、お花を見に行く。

そんなことが日常になり始めた今日この頃。

「煙草を吸い始めたのはやっぱり静ちゃんが影響？」

「そうですね、半分は平塚先生の影響かと」

「もう半分は？」

「……秘密です」

はぐらかす彼は私から目を逸らし煙草の煙を吐き出した。時折見せる大人の雰囲気、ふわりと私の顔を熱くする。

ゆっくりと、それでもじつくりと。

彼との時間は駆け引きなく刻まれる。

「私があげたアネモネは元気？」

「元気ですよ。水を掛けてやったら喜んでましたよ」

「ちゃんと話し掛けてあげなさい」

「…ぼっちにはハードルが高いですね」

お花に話し掛けるのにハードルとかあるの？

なんて思いながら、彼がアネモネに話し掛けている姿を想像したら笑えてしまう。と、笑いを堪えながら私はティーカップを傾けた。

「…雪ノ下さんの、冷めてませんか？」

「私、アールグレイは少し冷めたくらいが好きなの」

「へえ。…あ、すみません。ちよつと電話です」

私のアールグレイが半分程になる頃に、彼はスマホを持ち席を外す。

誰からの電話だろうか。

彼のスマホに登録されている電話番号なんてさほど多くないはず。

さらに電話をする仲と言えば……。

雪乃ちゃん？

ガハマちゃん？

「……………」

ドクンと動く心臓の血液に、私は不安を覚えてしまう。

……なんで不安？

喜ばしいことじゃない。

彼が雪乃ちゃん、もしくはガハマちゃんと仲良くしていることは。

彼に再開してから奉仕部の事情については何故か触れられない私にとって、そこは無干渉で無関心な領域であるはずなのだから。

「すみません……」

「え、あ、全然いいよ。……だ、誰からの電話だったのかなあ……って、聞いてみたり？」

「え？ ああ、三浦ですよ。……って知らないか。高校の頃のクラスメイトです」

三浦……。

私の記憶力を侮ってはならないよ。

三浦ちゃんってあの娘だよね。

金髪でギャルギャルしい……、隼人に利用されていた娘。

「…隼人のことを好きだった娘でしょ？へえ、比企谷くんとは無縁な感じだと思ってたけど」

「ああ、高3の時に葉山の件で奉仕部に依頼が来たんですよ。それでLINEを交換してから何かと利用されてるって言うか」

隼人の件……。

隼人が雪乃ちゃんに告白して振られたのも3年生の時だったっけ。

それと何か関係した依頼だったのだろうか。

「ふーん。どんな用事だったの？」

「ああ、今度の花火大会の場所取りを頼まれました。俺ん家から近いらしいんで」

「……場所取りを？それは三浦ちゃん、横暴過ぎないかしら」

「…そうなんすよ。しかも、そういう時って大体誘ってた男にドタキャンされたとかで付き合わされるんです」

「あははー。三浦ちゃんも男運がないねー…、ん？付き合わされる？」

「はい。紅葉狩りもスノーボーもお花見も、全部ドタキャンされて全部付き合わされました…」

……。

それって確信的めたもるふおーぜじゃない？

春夏秋冬折々の情緒を捉えたデートじゃない？

……三浦ちゃん、あなたって娘は。

「…素直じゃないなあ。三浦ちゃん」

「え？何がです？」

「んーん。何でもないよ」

面白い娘が多いんだから。
羨ましいよ。

「…ときに比企谷くん」

「と、ときに?…何すか?」

「その花火大会っていつなの?」

「えっと…、確か来週だったと思いますが」

あれ、私は何を聞いているんだろう。

冷めたアールグレイが茶色く渦巻く様を見て、鼓動が強くなる心に疑問を投じる。

「…場所取りとか、三浦ちゃんの為を思うならしない方がいいと思うなあ」
「?」

「だ、だってそうでしょ?人任せにし過ぎるのは良くないし!奉仕部は直接の手助けはしないって言ってたし!」

「…口調が三浦みたいになってますけど」

「……………監視します」

「はっ？」

ふう…、あつついなあ。

店内の温度、高過ぎない？

喉もカラカラ。

アールグレイが冷めていて丁度良かったわ。

「……………花火大会の日、比企谷くんが三浦ちゃんの手助けに行かないか、監視するから」

「……………」

キョトンとした比企谷くんと目が合うと、私はそれから逃れるようにカップに残ったアールグレイに目を落とす。

先程まで茶色かったアールグレイが今は赤く染まっていた。

ああ、違うか。

この色はお茶の水面に映った私の顔色だ。

??花びらはイルミネーションに??

歩き辛い。

お腹は苦しい。

それなのに、心は幸せで一杯だ。

先程までドレッサーで念入りに整えた髪も、薄めに施した化粧も、玄関に立て掛けた全面鏡で見直す度に手を入れたくなってしまふ。

前髪のズレが気になったり、口紅のノリを気にしたり。挙げ句の果てにはクルリと周り背後の気配りにまで目を通す。

タンポポをあしらった黄色の浴衣が、鏡の前で何度も何度もにらみ合う様子など誰にも見せられない。

「…前髪、横に流しちやおうかなあ…」

思い立ったが吉日とばかりに、私はヘアブラシを取りに行きまたもや髪型にテコを入れてみる。

「か、可愛い…、よね」

思わず呟いた言葉は、鏡の中の自分に問い掛けた物。

返答があるわけでもなく、ただただ妄想の中で彼が私に振り向いてくれることばかりを考えていた。

「よし。…行こう」

ようやく決まった今日の私は何点だろう。
可能な限り、満点の私を見せたいものだ。

普段の癖でヒールに脚を伸ばしそうになるも、それを制止し草履に履き替える。

偶々通りかかった着物屋さんで見つけて新調した可愛い花柄の草履。

鼻緒に指を通すと少しこそばゆい。

玄関を出て、カランと音を鳴らした足取りが足取りの軽さを歌っていた。

「ふふん♪ 監視監視い〜♪」

・

∴

∴

∴

待ち合わせ場所に到着したのは集合時間の10分前。

花火大会に行く人だろうか、所々には私と同様に浴衣を着た女性や片手に子供を引き連れた親御さんの姿が多々見受けられる。

「あ！おーい！比企谷くーん！」

周囲をキョロキョロと見渡していた彼を見つけ、私は年甲斐もなく手を大きく振ってしまった。

スルリと落ちる袖に、慌てて手を小さく振り直す。

「…本当に来たんですね」

「当然でしょ！キミを監視するのが私の役目なんだから」

彼は普段と変わらぬジーンズとTシャツだけのラフな格好で、鞆すら持ち合わせていない。

「嫌な役目ですね。……ん、タンポポ。なんか雪ノ下さんっぽいです」

「へ？私っぽい？」

「タンポポは陽気なイメージです。悪い意味じゃないですよ？」

「ほ、ほう。陽乃って名前に掛けたんだね？」

「はは。それじゃあ行きますか」

と、彼は花火大会の会場とは逆の方向に歩き出す。

「え？どこに行くの？」

「雪ノ下さん、運営の閲覧席とかで見慣れてるでしょ？」

そう言うと、彼はポケットからチュッパチャプスを取り出し口に啜えた。何かを啜えていないと落ち着かないとか。

「あつちの公園に、広くて見晴らしいの場所があるんです。静かな場所で見ると花火も綺麗ですよ」

—————

人並みに逆らい歩く事数分。

少し小高い場所に現れたのは広く抜ける草原。

チラホラと数名の先客が居たものの、確かに花火を見るには穴場スポットなのかもしれない。

「へえ、こんな所あつたんだ」

「はい。俺はここで四つ葉クローバー探しを特訓しました」

「あはは。だから得意だつたんだね」

ふわりと香る草の匂い。

芝生の上に比企谷くんが置いてくれた小さなハンカチの上に腰を落とすと、彼も隣に腰を落とす。

ようやく一息付いたとばかりにポケットから煙草を取り出し、彼はチュツパチャプスを噛み砕き啜え変えた。

「…煙草、すみません」

「んーん。いいよ。何か、私の知らないキミを見ているようで楽しいから」

「そうすか」

「うん」

白い煙が空へと登るのを見つめ、私は隣に比企谷くんが座っていることを改めて不思議

議に思う。

あの時、彼を拒絶したのは私なのに、心のどこかで彼を求めていたのは私だった。

退屈な日々を過ごす中で、思い出すのはいつも彼だった。

詰まらなくなった私を、絶対に見せられないと思ったのは彼だった。

だから、再開したあの日には喜びと悲しみが交わり合って……。

「……雪乃ちゃん達とは会ってるの？」

「……。偶に」

「私の話も聞いてくれてるのかな？」

「…」

無言で吐き出された煙草の煙。

ゆらりと登り消えていく様は彼のよう。

「……私、卒業したら……」

「花火」

「……」

「花火が上がりますよ」

私の声は掻き消される。

彼の声も同様に。

青く丸い花火が大きな音を立てて打ちがると、それに続いて次から次へと色んな花火が空を埋め尽くした。

「……卒業したら、フランスに留学するの」

「…雪ノ下から聞いてますよ。建築のデザインを学びに行くんですよね」

「…」

花火が音を鳴らす間に伝えた私の声に、彼はしっかりと返してくれる。

連続で上がる花火を見ながら、卒業後の自分を想像してみるも、どこかそれは私が私じゃないような気分になっていった。

と、溢れ出る様々な感情と問答していた時、私の肩が叩かれる。

「？」

「下、見てください」

彼は夜空に浮かぶ花火ではなく、下に広がる草原を見ると言うものだから。

何を意味して言ったかも分からずに、私は彼の指先に視線を向けた。

花火が音を鳴らし、夜空いっぱい真つ赤な円が浮かび上がる。

そして

その光に反射した草原が赤く赤く染めあがった。

全面に広がる赤色が、まるでお花畑の中に居るように。

「す、すい…」

緑色だった草の一つ一つが花火に照らされ、彩り豊かなお花へと生まれ変わる。

幻想のように、赤や青、黄色と変わりばんこに生まれるお花畑。

「お花畑に居るみたい！」

「ですね」

彼は静かに頷いた。

同じことを考えていてくれたことに嬉しくなる。

「…綺麗」

「…雪ノ下さんはお花屋さんになりたいんですね？」

「…うん」

「卒業までまだ10ヶ月もあります」

お花畑の中で彼は立ち上がる。

初夏の暑さは吹き付ける風がほどよく気持ち良い。

彼の向けてくれる優しい視線が、奉仕部で奮闘する彼を思い出させてくれるようで。

「好きな事やりましょうよ。悔いを残さないくらい。自由に楽しみましょう。……その方が、雪ノ下さんらしいです」

夕暮れに隠れるテレパシー

??七色のビューティー??

雲に見え隠れする月に手を伸ばしてみるも、それに手が届くことは絶対にあり得ない。
い。

そう分かっていたとしても、何度も何度も手を伸ばしてしまうのは、届かないことを確かめたいから。

部屋の窓から見える月はとても小さく儂いのに、私では辿り着けるはずもない場所で

在り続ける。

彼も同じだ。

近づけど近づけど、どこかスルリとかわされるような。

近くに居そうで触れることの出来ない幻想。

「…なんてね。さて、続き続き」

少しだけセンチメンタルなことを考えつつも、月明かりの綺麗な窓辺から離れて机に身体を向け直す。

1枚の紙にボールペン。

紙には未だ、何も書かれていない。

「…私がやりたいこと。やりたいこと」

先日の花火大会で彼と話したこと。
私の好きなことをやってみろ。
自由を楽しむ私らしさ。

「……」

比企谷くんのほっぺを抓る。

比企谷くんの指を食べる。

比企谷くんに頭を撫でてもらう。

比企谷くんにあーんしてもらう。

……。

書き切れない…。

って、これが私のやりたいこと!?

「ん〜！なしなし！〜こんなの私じゃない!!」

くしゃくしゃと紙を丸めてゴミ箱に投げ捨てるも、それは淵にあたって床に転がる。私の心は荒れ模様。

心のどこかに隙間ができていて、せいでコントロールが乱れたのね。

「…この前の花火大会みたいに、”今”を楽しめるようなこと……」

今を楽しむことには自信があつたはずだ。

楽しいことを見つけるのにも自信があつた。

色々な事を経験し、学び、飽きてきた。

その中で、いつまでも明るく灯し続ける一人の存在が、どこか大きく私を支配する。

飽きたら捨てればいい。

また面白いことを見つけるだけ。

「……でも、彼は少しだけ違う」

ポツリと溢れた言葉は誰にも聞かれているはずがないのに、なぜか背筋が痒くなり、身体が火照ってしまった。

「……むう」

私は完璧なお姉さん。

……そうだ、勉強を見てあげよう。

大学の講義は難しいもの。

きっと彼も苦勞をしているはずだわ。

何でも知ってる陽乃さんを彼に見せつけるのよ。

“陽乃さんは何でも知っているんですね。”

“何でも知らないよ。キミのことだけ……”

な、なんてね…っ!!

「…ふうー。暑い暑い。クーラーが壊れてるのかしら?」

リモコンを操作し設定温度を少し下げると、クーラーは心地の良い風を静かに優しく吐き出してくれた。

ちゃんと仕事しなさいよ、クーラー。

「さて、やりたいことも決まったし…、で、で、電話でもしようかな…」

21時を回ろうかという時刻。

少し夜分遅いけど彼ならきつと気にしないだろう。

私はスマホを片手に取り、画面をタップし彼の電話番号が記される電話帳を開いた。

……あとはココを押せば彼に繋がる。

指が震えるのは気のせいかな？

あれ、手が汗ばんできたかも…。

身体が凄く暑い。さつき室内温度を下げたのに。

「お、落ち着け私！電話をするだけじゃない！心を整えろ！息を吐け！思いの丈を彼に伝えるのよ!!」

せいっ!!

ぼん。

トウルルルル。

トウルルルル。

3コール程鳴った後に、スマホの向こうから小粋な電子音が鳴る。

それはスマホの先で彼と繋がった合図か。

少なくとも、暫くの無言が続く事から推測するに留守番電話サービスではないよう

だ。

「……」

『……?』

「……!」

『……あの、雪ノ下さん?』

「や、やつはろー!!」

『は?』

「あ、あはははー!私だよ!陽乃さんだよ!ガハマちゃんかと思った!」

『え、いや…。雪ノ下さんだと思ってましたけど』

「……へ?そ、それって心が繋がってるから分かってましたよってこと!」

『……』

「そ、その…。まだ時期尚早って言うかそういうのは結婚してからじゃないと恥ずかしいっていかまはずは結婚を前提にしたお付き合いからでお願いしますごめんなさいすみません」

『……心とかは繋がってないです。雪ノ下さんの電話番号は登録してたんで分かるに決

まってるじゃないですか。少し落ち着いてもらっていいですかねえ』

「!?」

心とかは繋がってないです。

繋がってないです。

ないです。

す。

無情な言葉に思わずスマホを落としてしまう。

床に打つかったスマホは虚しく私を反射し続けた。

『…っ！え、なんか凄いい音がしましたけど……。あれ？おーい。雪ノ下さん？……。？え、何これ。新手の嫌がらせ？』

スマホから聞こえる彼の声で我に帰り、私は慌ててスマホを掴み直して耳に当てる。

「…………私の心を弄んで何が楽しいのよ。……この淫乱童貞が！」

『……なんなんだよコイツ』

•

•

•

•

•

•

•

「それでね、講義が難しくくて苦勞してるんじゃないかなあつて思つて」

『ああ、それでわざわざ勉強を見てくれると』

「わ、わざわざとかじゃないよ。ほら、ここ最近、キミには愚痴みたいなことばかり言つてたからさ……」

『…別に気を使わなくてもいいのに』

「だから勉強くらいみてあげようかなつて。私つてほら、何でも知ってるし」

『そうですね、雪ノ下さんは何でも知っていますもんね』

「何でもは知らないよ。キミのことだけ」

『ん?え?…ん?』

あれ、思つてたのと違う反応。

ちよつと残念だな。

すると、雑談も交えた電話をしていたためか、いつの間にか彼に電話んをしてから1時間近く経つていたことに気が付いた。

最初の数分は記憶に無いけど…。

「あ、ごめんね。長々と話しちゃって」

『いや、大丈夫ですよ。…それじゃあお願いしてもいいですか?』

「え?何を?」

『……。勉強、見てくれるんでしょ?』

「あ、そうだそうだ。よーし!沢山見ちゃうよ!!」

『来週の土曜日なんてどうです?』

「おっけー!」

『それじゃあ、来週の土曜日に俺ん家で。よろしくお願いしますね。それじゃあ、おやす

みなさい』

「うん!おやす……。ん?……。え!?!ちよ、ちよ、比企谷くん家!?!?」

『……………』

返答の代わりに帰ってくる電子音。

どうやらスマホの向こうに彼はもう居ないらしい。

私はスマホを耳に当てたまま固まってしまう。

大抵のことには動揺をしない、もしくは動揺を隠せる私だが、今だけは存分に動揺させてくれよ。

なんせ…。

純血の乙女少女である私が男の家にお呼ばれされたのだから。

?? 純粹はトラブル??

電車を乗り継ぐこと数分。

午前中にも関わらずに蒸し返すような暑さがジリジリと、駅のホームに舞い降りる天使こと私の身体を包み込む。

珍しく電車を使ってみたのは彼の家に行く事を家族に知られたくないからだ。

優秀なドライバーも、母の前では口が柔らかくなってしまいうから。

「それにしても暑いなあ」

駅から出て直ぐにあるロータリーには学生らしき人影がチラホラと見受けられる。

待ち合わせ場所にはまだ比企谷くんの姿は見えない。

それもそのはずだ。

まだ待ち合わせ時間にはまだ30分以上もあるのだから。

暫くこの暑さから逃れるために喫茶店にでも入ろうかと思っていた矢先に、私の肩が背後から優しく叩かれる。

「っ……みゆ」

振り向くと、私のほっぺは彼の指によって突かれた。

あまりに彼らしくない行動に驚いたものの、触れられたほっぺから伝わる彼の温度に少しだけ顔を緩まされてしまう。

「早く来ておいて正解でした。こんにちは、雪ノ下さん」

柔和に笑う比企谷くんがそこに居た。

ふわりと私のほっぺから離れていく彼の指に名残惜しさを感じつつ、私は少しだけで毒付いてみる。

「むむ。乙女のほっぺを触るなんてセクハラで訴えられても知らないよ？」

「乙女なんて年齢でもないでしょ。さあ、行きましょう」

「ちよっと！そういう年齢ネタは静ちゃんの専売特許でしょ！」

「年齢ネタって……」

呆れ笑いを見せながら、彼はゆっくりと歩き出した。

彼の隣へ並ぶように私も歩き出すと、何も言わずに彼は私の鞆を奪い取る。

そんな気づかないや優しさを、私は今までされたことが無かったためか、慌ててそれを奪い返そうとしてしまった。

「い、いいよ！そんな重たくないし」

「そうですか？女性が荷物を持っていたら無言でそれを受け取れと教わっていたんですが」

「そ、そういうのはさ、もつとか弱い女性にしてあげてよ」

「…、そうですね。じゃあ」

ヒョイツと、彼は鞆を私からまたもや奪い取る。

「見た目だけならか弱い雪ノ下さんもその対象ですね」

「…っ!!…み、見た目だけってなによ！もう！比企谷くんは本当に比企谷くんなんだから！」

下心の無い優しさが。

偽りの無い優しさが。

私にはどこか気恥ずかしく、もどかしい。

遠慮無しに打つけられる彼の親切心が、私の強化外装をすり抜けて柔らかい所を刺激

する。

そんな感じ。

—————。

車通りの多い国道沿いから一本外れた生活道路の一角に、見た目から新築だとわかるマンションが一棟現れる。

そのマンションロビーで4桁の数字を入力すると、開かずの自動ドアが私達を迎え入れるように横へ開いた。

「へえ、良いマンションだね。オートロックのうえに立地も良い。築年数も新しそう。

一人暮らしの学生には勿体無いんじゃない？」

「まあ一人なら勿体無いかもですよね」

「一人なら？」

エレベーターに乗り込み5階のボタンを押す。

ゆつくりと動き出したエレベーターは直ぐに減速し、目的のフロアに辿り着いた。

512号室が彼の部屋らしい。

「ただいま〜」

「え？ただいま？」

玄関先で靴を脱ぎながら発せられた声に、部屋の奥から聞こえる元気な声。

ん？

一人暮らしじゃないの？

「おかえりー！お兄ちゃん!!あ！陽乃さんもいらっしやいませ！」

「こ、小町ちゃん？え、比企谷くん、キミ、一人暮らしって…」

「一人暮らしですよ？今年まではね」

「今年まで？」

私が現在の状況に玄関先で立ち止まっていると、小町ちゃんは丁寧に私の前へスリッパを置いてくれる。

「来年から私もお兄ちゃんと同じ大学に通うんです！」

「もう推薦でほぼ合格は決まってるみたいなんなんですよ。だから、実家を出るなら2人で済んだ方が安上がりだっていってお袋が」

……。

仲、良いですね。

狭いアパートで2人きりの勉強会を妄想していた自分が恥ずかしいです。

いやいや、小町ちゃんも良いコだし好きだよ？

……うん。

「そ、そうなんだー。あははー」

「それにしてもお兄ちゃんの言ってた強力な助っ人が陽乃さんだったなんてビックリしたよー！」

「ん？助っ人？」

「え？あれ？お兄ちゃん、陽乃さんに何も言っていないの？」

フロアリングにパタパタとスリッパを叩きつけながら、忙しくリビングとキッチンを往復する小町ちゃんは器用にも3つのカップを片手に持っている。

それを見て比企谷くんがカップを受け取り、私の前に置いてくれた。

「……雪ノ下さんには勉強っていうか、小町の小論文を添削してもらいたいです」

「へ？小論文？」

「はい。これを見てください」

と、比企谷くんがクリアケースから数枚の作文用紙を取り出し私の前に差し出した。

400字詰め の 作文用紙にはびつしりと文字が埋められており、それが20枚程

……、多くない？

「うへえ、凄いなえ。推薦に必要な小論文ってこんなに書かなきゃだめなんだ……」

「違うんです」

「え？」

「3枚でいいんです。3枚でいいのに、小町は20枚も書いてしまったんです」

驚愕、絶句とは正にこの事。

私の身体は固まり、時間さえも流れることなく動きを止めたかのような錯覚に陥った。

つていうのは大袈裟だけど、私の考えていた添削とは少しだけベクトルの違う方向の問題らしいことは分かった。

「あ、あははー、書き過ぎて困っちゃうなんてある意味才能だよね」

「そうなんです。小町は天才なんですよ。この小論文、芥川賞とか狙えるんじゃないかね？」

「お兄ちゃん、それは言い過ぎだよ。候補止まりくらいだ思うなあ」

そういえば、この2人つてお互いには甘いよね。

なんとなく懐かしいけど今は面倒臭いなあ。

「……と、とりあえずさ、先ずはこの中からトピックスを一つ取り上げて、それについて

だけ書くつてのはどう?」

分厚くなった小町ちゃんの小論文を手に取り、私は苦笑い気味にそれを読み始める。
これだけ書けるのだ。

きつとテーマが壮大に違いない。

ー小論文ー

【私のお兄ちゃん】

ーー比企谷 小町ーー

……。

「……。小町ちゃん、全部書き直そうか」

「!?!」

・
…
…
…
…
…

「出来た!!」

「お、やっと完成したか」

「……………」

5階から覗く夕焼けは普段よりも少しだけ明るく切ない。

真つ赤に染まるリビングには小論文を両手で掲げてはしやく小町ちゃん。

小論文の作成開始から7時間、ようやく完成したそれ3枚の原稿用紙にしっかりと収まっている。

「出来た出来たー!!」

「ほら、はしゃいでないで雪ノ下さんにお礼を言え」

「うん！雪ノ下さん！ありがとうございます！」

そうやって腰を90度も折ると、直ぐに起き上がり小論文をクリアケースに締まった。

「無くさないようにリュックに締まってくる！」

元気だなあ。

7時間も机に張り付いてたのに……。

私はもう頭が痛いよ。

「…すみませんね、雪ノ下さん。あいつ、書きたい事は沢山あるらしいんですけどまとめられないんですよ」

「そうみたいだね。でもまあ、そういう所も可愛いじゃない」

「そうですね。自慢の妹です」

「あはは」

比企谷くんは私が小町ちゃんを褒めた事に満足したのか、ゆつくりとリビングの机に散らかしっぱなしになっていた原稿用紙やシャーペンを片付ける。

「…さて、夕飯の支度でもしますか」

「あ、もうそんな時間か…」

あつという間だったなあ。

あんまり話せてないけど、時間だけは無情に過ぎていつてしまったのね。

夕暮れ時の時間はどうしてこんなに寂しくなるの？

熱気に包まれた街も、今は蝉の鳴き声だけを残して暑い夏を忘れさせる。

「雪ノ下さん。何か食べたい物とかありますか？」

もつと。

心を弾ませる言葉を私に頂戴。

「え？」

「夕飯、一緒に食べるでしょ？」

夏の暑さが和らぐこの時間に、改めて再燃する私の心はどこまでも正直だ。

一緒に居たいと言葉にできないのに、優しい言葉を掛けられると心は喜んでしまう。

ねえ、雪乃ちゃん。

お姉ちゃんにも、少しでも我儘を分けてちょうだい。

「……」

「……？」

頬の暑さにあわてながらも、私は冷静さを取り繕いながら彼に笑いかける。

「…うん。一緒に食べよ！」

彼は静かに頷いて、不自然に私から目を背けた。

照れてるのかな。

照れててくれたら嬉しいな。

赤くなる彼の耳は夕焼けに照らされているからだろうか。

「ねえ、比企谷くん」

私はそつと彼の背中を抱きしめる。

同じくらい的身長だったのに、この2年でこんなに大きくなったんだね。

抱き締めるというよりも、彼の背中に抱き着く形になっているのは気のせいかな。

「どうやって、私を助けてくれるの？」

冷たく暖かなフラーレン

?? 赤く染まれば??

一夏の思い出はすぐさま風化して黒歴史へと変わり行く。

彼がそんなことを言うものだから、私はスマホに保存された写真のデータを一枚一枚ゆつくりとスクロールして見ていった。

ここ最近の被写体はもっぱら彼の姿ばかりである。

我ながら呆れてしまう。

お花屋さんで撮った彼の後ろ姿はどこか嬉しい。

花火大会中に撮った彼の横顔は暖かく優しい。

彼の家で小町ちゃん撮った私と彼の2ショットは、ふわりと切ない赤で頬を染めて
いる。

“どうやって、私を助けてくれるの？”

なんども反芻される言葉は、身を悶えさせる程に絶妙な辱めを与えてくれる。

なんであんなこと言っちゃったんだろ……。

その後の空気と言ったら……。

「……………うう。あんなの私じゃないよお…。比企谷くんに呆れられちゃうよね」

自分の失態に、私は思わずクッションに顔を埋めてしまう。

ふもふもした感触の奥に香る優しい香りは柔軟剤の匂いだろう。

……………比企谷くんの香りに似てる…。

「……だ、だめだ。これじゃあ私……。彼に惚れ……。つ、く、くつそー!! 違う違う!! そんなんじゃ!!」

ポフンっ、と投げられたクツションは壁に打つかり無情にも床に転がった。

ああ、ごめんねクツション。

八つ当たりをして。

すると、私の心臓を跳ねさせるように、扉を軽く叩くノックの音が部屋に響き渡る。

「っー……。な、なに?」

「陽乃? あなた、何をやっているの? 物音が下にまで聞こえていたわよ?」

「な、何でもないよ。ごめんなさい」

心配そうに扉の隙間から顔を覗かせるお母さんは、一言二言と零しながら腕時計で時間を確認する素振りを見せた。

「陽乃、この後少しだけ時間はある？」

「時間？午後に少しだけ用事があるけど、それまでなら…」

すると、お母さんは安心したように手をポンと合わせる。

「よかった。それなら貴方も同席してちょうだい。これからお得意先の丸岡さんがいらっしやるのよ」

「……っ」

「ほら、貴方も大学を卒業したら留学するでしょ？今の内から顔を合わせておいた方が良いと思って」

ズキン、と。

重く広がる黒いモヤモヤが私の心を包み込む。

先ほどまでの、虹色に彩る心の晴れ模様は嘘のように。

黒一色に、私の世界は移り変わった。

「じゃあ、下で待つてるから」

がちやんと閉まった扉と、固まる部屋の空気。

途端に頭を叩かれたみたいなの現実復帰は、私の顔を強く歪めさせたことだろう。

ふと、鏡を覗く。

そこに映った偽りの笑顔を貼り付けた自分に嫌気がさす。

スルリと床に落ちたスマホをベッドに置き直し、私は背筋を伸ばして黒い世界を歩き出した。

ブルブルと震えるスマホに気づくこともなく――。

.....

f r o m 比企谷くん

待ち合わせはいつもの喫茶店でいいですか？

.....

.....

.....

.....

.....

「さっしやい、丸岡さん」

「お邪魔します。いやあ、雪ノ下さん、今日は突然すみませんね」

玄関先から聞こえる声は野太く響く。

丸岡さんは前に一度会ったことがあった。

大きくて丸く、とても優しい人。

父の会社と協力関係にあり、とても有効的で頭の回る人だと父は評価していた。実際、丸岡さんに嫌味な所は一つもない。

「おや、陽乃ちゃん。久しぶりだね」

「丸岡さん、お久しぶりです」

丁寧を頭を下げるも、彼は手を前に出してそれを制してくれる。

「本当によく出来たお嬢さんだ。学校では内の愚息が世話になっているようで」

「とんでもありません。丸岡くんにはとても良くしてもらってます」

丸岡さんはココロココロと笑いながら客間のソファアに腰を降ろした。

暫くして、お母さんが紅茶を持ってくると、話題は会社の来年度以降の予算やら方針やらの話に。

丸岡さんは父に強く言えない節があり、意見をお母さんから間接的に伝えてもらうようにと頼むことがある。

父の独り相撲に成らぬよう、堅実に、冷静。

丸岡さんは雪ノ下の会社にとって、無くてはならない存在であるのは間違いない。だからこそか、お母さんは丸岡さんとの繋がりをどこよりも大切にしているのだ。

「ああ、陽乃ちゃん。そういうえば留学するんだってね」

「っ、…はい。卒業して直ぐに渡ろうと思ってます」

「日本はね、極東の島国にも関わらず文化は世界でも随一だよ。だからといって外国の文化を蔑ろにしちゃいけない」

「はっ」

丸岡さん自身、若い頃に留学をした経験があるからこそその言葉は私に重く伝わる。真剣な眼差しで、若い娘にしつかりと声を掛けてくれる大人は貴重であろう。

「まったく、本当に雪ノ下さんの家は羨ましいよ。うちの愚息と言ったら1年で海外から帰ってきちゃってね」

「あら、息子さんが留学したのは高校生の頃でしょう？立派じゃないですか。ねえ、陽乃。健二くんとは留学について話してないの？」

健二くん……。

丸岡つて健二つて言うんだ。

「あんまりそう言う話はしないかな」

「そうなのかい？それなら留学する前に健二に色々と聞くといいさ。今日だって家でゴロゴロしているはずだ。よかったら午後にも会ったらどうだい？」

丸岡さんは少し身を乗り出しながら私に尋ねる。

そのとき、私は初めて理解した。

なぜお母さんがこの場に私を呼んだのかを。

黒い世界は大きく大きく広がっていく。

私の隣でそれは良いとばかりに頷くお母さんの顔を見れない。

…だめ。

これから私には、大事な用事があるの。

彼と沢山お話をしてお花屋さんに連れていってもらって、ゆっくりと、ゆっくりと、優しい言葉で温めてもらう用事が…。

“雪乃ちゃん、我儘いっちゃだめだよ”

…黙っててよ、私。

「…はい。是非お願いします」

??黒く染まれば??

「やあ、陽乃さん」

昼下がりの太陽は空高く。

雲ひとつない天气が嘘のように私の心はどんよりと曇っていた。

「こんにちは、丸岡くん」

駅のロータリーで待ち合わせた人物は、派手な装飾こそ身に付けてはいないものの、

所々に嫌らしく光る高価な品をチラつかせる。

「ウチの親父が変なこと言っただけだね」

「いいえ、とても素敵なお父様ね」

偽りを貼り付けた私は横に並んだ彼に微笑みかける。

「時間もあるし、とりあえず喫茶店でコーヒーでも飲みながら予定を決めようか」

喫茶店…。

そうだ、比企谷くんはメールを入れなくては。

…遅れると。

そう思い、私はポケットに手を伸ばすもスマホの気配は無い。

さり気なく鞆に手を入れてみるもそれは見つからない。

「……………」

「ん？どうかした？」

「……。いや、何でも……」

焦る気持ちを抑えながら、私は丸岡の一步後ろを歩く。

私としたことが、スマホを部屋に置きっ放しにしてしまったのだろうか。

それでも、どうにか比企谷くんに現状を伝えようと考えてるも案は浮かばない。

「……」の喫茶店にしよう。良い豆を使ってるらしいからね」

おまえに豆の何が分かるんだ、と悪態を付きながら、私はどうすることも出来ずに彼に続いて喫茶店へと入店する。

涼しい冷房で頭を冷やせば明暗が浮かぶかもしれない。

店員さんに通された席は仕切りで別れた半個室。

なんで喫茶店で半個室？

周囲の静けさを楽しみながらオープンにコーヒーを啜るのが醍醐味なのに……。つて比企谷くんが言ってたし。

「陽乃さんもアイスコーヒーでいい？」

「うん、いいよ」

注文して直ぐに運ばれてきた2つのブレンド。

冷たい結露を身にまとったコップの横に置かれたガムシロップには可愛らしい花柄が飾られていた。

「このコーヒーは風味が凄く良いんだ。ガムシロップなんか淹れたらもつたいないくらいにね」

「そうなんだ。私、コーヒー好きなの」

主に比企谷くんと一緒に飲むコーヒーが好きなの。

「それはよかった」

アイスコーヒーをくいと傾けると、苦味が口の中に広がる。

苦っ…。

…ガムシロップ入れたいなあ。

「…お互い大変だよね」

「え？」

「いや、周りの反感をかうかもしれないけど、親が立派だと子供には凄いプレッシャーになるだろ？」

「…まあね」

「留学するんでしよう？…俺も、高校の頃に1年留学してね。…正直不安で潰れそうになる毎日だった」

不安で潰れる…。

そんなわけあるか。

不安じゃ人は潰れない。

人が潰れるときは心が死んだ時だけだ。

別に私は留学が不安だとか、自信がないだとか思っているわけじゃない。

ただ、やりたいことをやれなくなることが嫌なだけなんだ。

「俺で良ければ何でも相談に乗るよ」

「そう。ありがとう」

「生まれが似た者同士、それに……、これからも何かと支え合う機会があると思う」
「…そうかなあ」

「本当は、もっと早く言おうと思ってただけど……、もう気付いてるんでしょ？」

もう気付いてる？

あんたのしたたかな下心ならば充分に見抜いているよ。

「付き合ってくれないか？」

それを言わせぬようにのらりくらりとしていたが、両家の両親にまでしゃしゃり出て来られたらそうもいかないか。

おそらく、お母さんは私と丸岡の婚約を望んでいる。

丸岡さんとの繋がりを確実な物にするためにも、私と丸岡の婚約は絶対的に必要な事だから。

「……」

「…陽乃さん？」

「少しだけ…、考えさせて」

「……」

「ほら、私達だけの問題じゃないじゃない？お母さんや、貴方のお父様にもお話をしなくちゃだし」

「そうだね。うん、わかった」

覚悟を決める覚悟を。

自由を手放すにはまだ惜しい年齢だ。

やりたいことが沢山ありすぎて、まだ、自分を奪われたくない。

そんな我儘を通せる程、雪ノ下家が甘くないことも知ってるつもり。

それでも。

彼に……。

比企谷くんにすぎるだけの猶予を私に頂戴。

・

∴

∴

∴

∴

その後、丸岡と分かれた私は急いでいつもの喫茶店へと向かう。

既に約束の時間からは2時間も過ぎてしまっているが。

日は沈んでいないのに、辺りはどこか薄暗く、先程まで雲ひとつなかった空は分厚い雲に覆われていた。

私の心も空も、すべてが曇天模様。

なんでこんなに上手くいかないの？

器用にこなしてきた私が、今はどうしてこんなにも格好悪く、慌て、不安に駆られているのよ。

気づけば足には酷い激痛が走っていた。

……慣れないことをするもんじゃないわね。

ふと、ようやく見えてきた喫茶店に、少しの安堵を抱きながら急いで扉を開ける。からんころんと小粋な音を立てる鈴に、店員さんの目がこちらへと移った。

「いらっしやませ」

いつもの店員さんが私を出迎える。

店員さんは気が付いたように私と1つの席を交互に見渡した。

「あの、お待ち合わせのお客様ならつい数分前に出て行かれましたよ？」
「…そ、そう。ありがと」

優しい風は途端に止んだ。

そりや帰るよね。

連絡もなしに待ち合わせ場所に現れないなんて。

私は店員さんにお礼だけ言うのと店を出る。

しばらく何も考えずに外を歩くと、空からは涙のような大粒の雨が降り出した。

黒は嫌い。

暗くて前が見えないから。

黒い花なんてちよつとも可愛くないし。

それでも、黒い世界が私の居場所になりつつある。

大丈夫、前なんか見えなくても、周囲の期待に答え続ける事が私の道標になるのだから。

与えられた課題をクリアし続ける人生こそ、私の生きている世界そのものなのだから。

頬を落ちる一粒の水滴が、他の水滴よりも少しだけ暖かい。

これが涙だと気づくのにそれほど時間は掛からなかった。

「……もう、イヤ……。全部全部、大嫌い……」

雨で冷えた身体から力が抜ける。

びしょびしょになった服が気持ち悪い。

「……」

ゆつくりと、空からは流れる雨が止んだ。

「午後の降水確率は50%でしたよ？雪ノ下さんにしては不用心でしたね」
「っ！」

青い傘が私を覆う。

幸せな声と暖かな優しさが、目の前から溢れ出るように。

「…………ごめん。ごめんね、比企谷くん」

「…ん、気にしてません」

「違うの、そうじゃなくて……。私……」

君の理想からかけ離れてしまう。

格好の悪い不自由な人間になり落ちる。

私はその事を謝っているんだ。

「格好悪くてごめんね。詰まらなくつてごめんね……。もう、キミの知ってる私じゃないよ、ごめんね」

涙で濡れた顔はきつと不細工だろう。

雨で髪もぐちゃぐちゃだ。

親の期待と将来に、私はついに自由を失う。

卒業までの猶予も無い。

私は丸岡の告白を受けなくてはいけないから。

「ごめんね、ごめんねっ……」

ふわりと、静かな声が傘の下で飛び回る。

丁寧に撫でられる頭には暖かな彼の手が乗っかっていた。

「はは。今の雪ノ下さんは人間味があつて面白いですよ。顔も最高に笑えます」
「……へ？」

比企谷くんは自らの袖で私の涙を優しく拭いてくれながら、小さく笑つて眩き続ける。

「鼻水とか、雪ノ下さんも垂らすんですね」

「っ！」

「ほら、チーンして」

「で、でも袖が汚れちゃうよ？」

「ん、大丈夫ですから」

彼の声には眠気を誘う魔法があるのかしら。

思わず身体を委ねたくなってしまふ。

気丈に振る舞おうと思えば思うほどに綻びが出てきてしまい、彼の前ではただの子供のように我儘を言いたくなってしまふ。

「逃げちゃいましょうか」

「え？」

雨はいつも突然で。

良いことなんて一つもないと思ってた。

彼の言葉に私は理解が追いつかない。

「駆け落ちしちゃいましょう」

これからのドラマチック

??彼色クレパス??

雨が止み、月と星だけに照らされた街はどこか幻想的で、私の手を引く彼の手は何よりも暖かく、夢見心地の良い感触を私に与えた。

ゆっくりと導かれるように、私は彼の背中を見ながら歩き続ける。

駆け落ちしちゃいましょう。

なんて、突然の申し出に私は思わず首を縦に振ってしまった。

すごく深い所へ落ちそうになった私の身体を包み込むように、彼はそつと救い出してくれる。

「……あ、あの、駆け落ちって……」

背中に投げかけた言葉に、比企谷くんは答える事もなく、そつと引かれていた手に力が少し入るだけ。

柔らかそうに跳ねるアホ毛はひよろひよろと周囲を警戒するように揺れる。

なんか雰囲気がいつもと違うような……。

「……ん、ちよつとそこに座りましょうか」

「……うん」

ポツリと置かれた公園のベンチを見つけると、比企谷くんは私だけを座らせ自販機へ

と向かっていった。

夏の名残を残した熱気が少し物悲しい。

「コーヒーで良かったですか？」

「うん。出来れば甘い方がいいな」

「それならコイツを渡しましょう」

「それは甘すぎるからいらない」

「あらら」

彼との会話が全て丸いシヨボン玉のようにふわふわと浮かんでいく。

気持ち良いんだよなあ。

比企谷くんは黄色と黒のストライプが特徴的なコーヒーを大事そうに抱えながら私の隣に腰を下ろした。

「服、まだ濡れていますか？」

「んーん。直ぐに乾いちゃった。でも髪はぐちゃぐちゃのままだね」

「似合ってますよ」

「そう?..ありがとう」

そつと交わる冗談の数々が全部、私のお腹に優しく触れているみたい。

時刻は午前0時を回ろうとしている。

このまま本当に、比企谷くんと何処かに行ってしまったみたい、そんな願いを口に出すこともなく、私は受け取ったコーヒーに口を付けた。

「...美味しい」

「やっぱりコーヒーは鬼糖に限りますね」

「微糖で十分だよ。..ねえ、比企谷くん...」

「はい」

「もしも...、もしも本当に、私が駆け落ちしたいって言ったらさ、...。君は...」

君は消え入る果てまで付いてきてくれる?

と、それはあまりに酷な冗談だろうか。

雪ノ下家に無関係な彼を巻き込んでまで、私は救われたいと思わない。

自由が欲しいと思わない。

彼には人並みの幸せを手に入れてもらいたいと本心から思うし、それを私の我儘で失わせるわけにもいかないから。

ふと、この一瞬を忘れまいと、そつと彼の肩に寄り掛かる。

「…今日だけだから。今日で……、お終いだから」

ほんの少しの勇気を頂戴。

ほんの少しの優しさも。

ほんの少しの本物も。

「……」

「雪ノ下さんはいつも1人ですね」

「…私が1人を望んだの。これまでも、これからも、ずっと1人…」

私は何でも出来るから。

誰からも羨ましがれ、頼られ、敬われ、完璧な人間。

きつと、私と関わった人の中に、私が悩みや不安を抱えているなどと考える人は居ないだろう。

すると、比企谷くんは煙草をポケットから取り出し口に咥えた。

カチツと火を付けると、肺に含んだ白い煙が口から一斉に飛び出す。

「……。俺が煙草を吸い始めた理由を知っていますか？」

「……静ちゃんの影響でしょ？」

「前にも言いましたが、それは半分だけ正解です」

彼はこころと笑いながら白い煙を吐き続けた。

「早く大人になりたかったんです」

「大人に？」

「はい。格好の良い大人に。……まあ、中身を除けば平塚先生も格好の良い大人に見えますからね」

「ふふ。静ちゃんに言ったら殴られちゃうね」
「そうですね」

比企谷くんと再会して最初に抱いた印象を思い出す。

しなやかに伸びる指に挟まれた煙草と、落ち着いた雰囲気醸し出す哀愁が、少なくとも私より年上だろうと勘違いしたつけ。

ふふ、十分に効果が出てるじゃない。

「あの頃の俺は傷つくことにはかなり怯えて、本心を隠すことが最善だと勘違いしていて」
「……」

「…いや、最善だとか言ってる時点で、今もガキなんでしょうけどね。きっと、雪ノ下さんだったらもっと上手く収められたのかなって、今でも思います」

「…私だって…、嘘で塗り固めて、周りの目ばかり気にしてるよ」

お互いに目を合わせクスクスと笑い合う。

甘い甘いコーヒーばかりを好んで飲むのは苦い経験が豊富だからか。

彼はいつも自らを傷付けた。

身を守る手段を選ばないことに、私は親近感を抱いていたのだろう。

ただ、彼は私と違ってすべてを背負うから、偶に危なかつしくて見てられない。

守ってあげたくなる。

学生服に身を包んでいた頃の比企谷くんはとても不確かに揺らいでいたんだ。

そんな彼が、卒業式の日に自らを傷付けることを辞め、本音を隠すなんて言うものだから…。

「私の出番はきつと、あの日に無くなっていったんだね」

「そうかもしれないね。……きつと、次は俺の出番なんだと思います」

彼は短くなった煙草を飲み終えた缶に押し込み、それをゴミ箱に向けて放り投げた。綺麗な放物線を描いた缶は、ゴミ箱の中へと吸い込まれる。

「大人振って、背伸びをして…、ようやく雪ノ下さんの横に並べました」
「んーん。もうとつくに追い抜いてるよ」

ベンチから立ち上がった比企谷くんは私に向かって手を差し伸べた。

それを掴むと強い力で引かれ、勢い余ったフリをして彼の胸を飛び込んでみる。

彼の胸に微かに残る花の香り。

キュッと包み込まれた身体は比企谷くんの体温をしつかりと感じる事ができる。

「私、お花屋さんになりたいの」

「はい」

「お嫁さんにもなりたい」

「はい」

「優しい旦那さんと一緒に、甘い香りのコーヒーが飲めたら最高に素敵だと思わない？」

「ええ。砂糖を10個くらい入れて飲みたいものです」

「ふふ。それは入れすぎだよ」

「ははは」

比企谷くんの声がくすぐったい。

彼の声が身体中に充満していく。

抱き着いたこの腕はもう離したくないから。

ずっと一緒に居たいから。

「私の夢、君が叶えてよね」

彩りラブソテイ

??水の偶像??

緑豊かな庭園を覗ける静かな場所。

値段が値段だけに、店内には若者の姿はあまり見られず、どちらかと言うと貴婦人染みた気品のある雰囲気のある喫茶店だ。

私はアイスコーヒーを少しだけ口に含む。

美味しい。

苦味とか香りとか、あまり深くは分からないけど、豊潤で色彩豊かな風味が口に広がった。

「…陽乃、言いたいことはそれだけ？」

ふと、目の前に座るお母さんが、眼光鋭く私を射抜く。

着物で身を包んだ姿がどこか過去の遺産を思い浮かべるが、現代アートの囲まれた店内のレイアウトとのギャップに幻想感さえも漂わせた。

「はい」

「…はあ」

お母さんはため息を吐きながら頭を抱え、もう片方の手でアイステイを傾ける。

呆れてるのかな。

それとも失望？

「…留学もせず、雪ノ下家にも入らず、大学を卒業したら好きなことをして生きていきたい。そういうこと？」

思いを言葉に並べられると、確かに無茶苦茶なことを言っていると改めて理解できるわね。

ただ、この我儘は意地でも貫く。

この我儘だけは、私の全部を掛けてでも……。

「ええ。そう言っているのよお母さん。…期待に応えられなくてごめんなさい。不肖な娘でごめんなさい。……でも、私は……」

大切な人を見つけることが出来たから。

「陽乃……」

ふわりと溢れる一筋の涙に、自分自身も驚きを隠せない。

「……………」

「…はあ。…数年前に、雪乃が〃お友達〃と歩いている姿を見た事があるわ」

小さく語られる言葉がポツリポツリと。

お母さんは私に目を向けることもせず、庭園を眺めながら話し出した。

「雪乃はあまり、感情を出さない娘だと思ってた。…あなたと違って、活発な訳でもなかったし」

「…………、ゆ、雪乃ちゃんも本当は…」

「ええ。…知っているわ。とても楽しそうに、素直にお話が出来て、幸せそうに…………、笑うことも出来たのよね」

お母さんは感慨深げに目を細めると、ほんの少しだけ悔しそうな顔を浮かべた。彼に出会う前の雪乃ちゃんと、彼に出会った後の雪乃ちゃん。

どちらが素敵な女の子かなんて比べるまでもない。

「…親心子知らずなんて言うけど、きつとそれは逆も言えるのね。私は雪乃のことを何も知らなかった。……いえ、貴方の事も、私は分かっていたのかもしれないわね」
「そ、そんな事は！」

「…雪乃も陽乃も、素敵に笑うようになったわ。……それは、きつと彼のおかげなんですよわね」

お母さんは彼を知っている。

いや、確かではないが、1度だけ彼と鉢合わせたことがあると言っていたような……。

「…わ、私は……」

「…分かりました。留学の件は無しにします」

「お、お母さん……」

「その代わり、恥ない生き方をすること。……あと、彼を私たちに紹介すること。いいわね？」

「え、あう、べ、別に紹介とか……。ひ、比企谷くんも突然は困っちゃうだろうし……」

赤く染まる頬がとても暑く、思わずアイスコーヒーを沢山飲んでしまう。

ふわりと浮かぶ彼の顔は優しく微笑み、私の頭を優しく撫でてくれるのだ。頑張りましたね…、なんて言ってくれたり。

えへへ。

「……」

「…えへへ」

「だらし無い顔をしないの」

「!？」

日がまた昇る。

浮ついた気持ちを静かに包み込んでくれるような陽気が私にぴったりだ。

早く彼に伝えなくちゃ。

お母さんに本音が言えたよって。

これから少しずつ一緒に居てくださいって。

「それにしても、比企谷さんってどんな方なの？正直、一度しかお会いしたこともないし、顔も覚えていないのよ」

「ど、どんな方って言われても…。ぶっきらぼうだけど優しくてえ、素直じゃないくせに正直でえ、人のことを助けてばっかりでえ」

「…このコはダメかもしれない」

若干引き気味のお母さんを気にすることも無く、私は彼の特徴を伝え続ける。

「背も高くてね、顔もカッコいいの。少しだけ目は腐ってるけど。それとね、左右に揺れるアホ毛が可愛くって、大人ぶってるくせにコーヒーにはお砂糖を10個も入れるのよ」

「…？ねえ、陽乃…」

「ちよつと、まだ話しは終わってないんだけど」

「も、もう充分にわかりましたから。それよりも、その比企谷くんって…」
「ん？」

お母さんは目を見開いて私の後ろに視線を送っていた。

その視線の先に私も目を移す。

「せんぱーい。そんなにお砂糖入れたら身体壊しますよー？」

「あ？ 疲れた身体には糖分が大切だろうが」

??戸惑いパニック??

偶に掛けているメガネ。

ゆらりと揺れるアホ毛。

腐った瞳。

照合の結果、彼は彼に違いない。

お高いメニューのせいかな若者が少ない店内で、彼は落ち着いた様子でコーヒーを傾けていた。

私の妄想から飛び出てきたの？

あれ？でも余計な子が居るような…。

「は、陽乃…？」

「……」

なんだろう。

お腹の底から計り知れない真つ赤でグツグツとした物が湧き上がってくる。

無言で立ち上がった私を見て、お母さんは怯えた様子で声を掛けてきたけども、私は

答えない。

カツカツと、ヒールが床を叩く音と同時に彼の背後に近づいた。

……へえ、私がこんなに頑張ってる間に、君は浮気をしちゃうんだ。

「せんばい、絶対身体壊し…っ!？」

「ん? どうした? 幽霊でも見つけたような顔をして」

ガシッと、私は彼のアホ毛を掴み取る。

「え? 痛い? だ、誰だ!? 俺のアピールポイントを掴んでるのは!？」

「わ・た・し」

「ーーー!？」

「あれはアーティフィシャルフラワーですね。すごい綺麗だ。…造られた花は人の心に溶け込みますね」

「[[「……」]]」

私たちは先程まで座っていた席を移動し、4人が対面する席に座り直した。

そこに座るのは、私と苦笑いを浮かべるお母さん、オロオロと私とお母さんの顔を交互に見つめる一色ちゃん、そして――

「知ってます？喫茶店の喫って喫煙の喫じゃないんですよ？」

冷静な口調とは裏腹に、額から大量の汗を流す比企谷くん。

「……知ってるよ。だってそれ、私が教えてあげたんだもん」

「あ、そ、そうでしたね。雪ノ下さんは何でも知ってますね」

「何でもは知らないよ……。知っているのは君の事と君にまつわる事。……それだけ」
「怖い！」

パン、と。

小さな音が鳴り響く。

ふと、その場を落ち着かせようとお母さんが小さく手を叩いたのだ。

その音に私が視線を移すと、比企谷くんはホツとしたように胸をなでおろす。

「す、少し落ち着きましたよ？……えっと、貴方は比企谷さんよね？」

「は、はい。1度お会いしていますわが」

「ええ、覚えているわ。それで、貴方は……」

と、困った顔を浮かべながらお母さんは一色ちゃんの顔を見つめると、一色ちゃんは畏まったように身体を小さくし答えた。

「は、はい！私は一色いろはです。あの、陽乃さんと雪乃さんにお世話になってます」

「私は世話した覚えなんてないけど」

「あう…」

は——！

あざとい!!

あざとすぎて殴りたくなっちゃう!!

「こら陽乃。…ごめんなさいね、えっと、一色さんは雪乃とも面識があつたのね」

「隼人とも面識あるよね？隼人のこと好きだったよね？比企谷くんには興味も何もないよね？今日も偶然会ってお茶してただけだよね？」

「…こ、怖いです！…わ、私は…」

「比企谷くんと同じ大学なんですよ？知ってるよ？だって調べたもん。比企谷くんのこ

とは何でも知ってるから私」

「」…」

おっと、ちよつと暑くなり過ぎたかな？

少し落ち着こう。

スー、ハー、スー、ハー。

「はあ、陽乃。貴方は独占欲が強すぎるのよ」

「うう〜」

「ねえ、比企谷さん？失礼だけでも、一色さんとはどういうご関係なの？」

ふわりと丁寧な口調で発せられたお母さんの地雷がテーブルに落ちる。

こ、こいつ……。

「…先輩と後輩、それだけですよ。…今日だって、お礼も兼ねて飯を奢る約束をしただけで」

「酷いです！私を弄んだんですか!？」

「お、おまえ、変なことを…」

「ふふ、仲が良いのね」

な、なんだろうかこの空気は。

私を無視して話が進む感じ…。

「…はあ、雪ノ…、陽乃さん。前に一緒に行った花屋を覚えてますか?」

「ふん。お餅でしょ。覚えてるに決まってるじゃない」

「あそこ、こいつに紹介してもらったんですよ」

「え、一色ちゃんに?」

聞くと、どうやらフラワーショップ お餅の店長さんは一色ちゃんの親戚なのか。か。

最近になって花に興味があると言い出した比企谷くんが、一色ちゃんに条件付きでお餅を紹介してもらったらしい。

と、その話を聞いているときに一色ちゃんは頬を膨らませながら不満げに比企谷くんのお腹を突いていた。

「てゆうか、あの店に陽乃さんで行ったんですかー？」

「まあ、たまたまな」

ん？ たまたま？

あの日は確か、比企谷くんが良い所に連れていつてくれると迎えに来てくれたような…。

「むうー。姉妹揃ってチョロインですかっの」

「おまえもう黙っとけよ。…それよりも…」

一色ちゃんは頬を膨らませたままアイステイーをストローでぶくぶくと泡立て始めた。

すると、途端に比企谷くんが真面目な瞳で私を見つめる。

ああ、君の事だから何かしら察したんだね。

「陽乃さんこそ、お母さんとこんな所で何を話していたんですか？」

キュツと縮まった心で息苦しくなった私の思いを、お母さんの前で口に出していいものなのか。

私だって親不孝者にはなりたくない。

喜んだ顔で

留学しなくて済んだよ！

なんて言ったら、きつとお母さんを悲しませることになるから。

「…ふふ。陽乃の留学の件について話していたのよ」

「…っ」

「…興味深いですね」

比企谷くんはアイスコーヒーを傾けながらもお母さんから目を逸らさない。

「陽乃がね、留学をしたくないって言うのよ。ねえ、比企谷さん。貴方はどう思う？」

その言葉は確かに、それでも不確かに、そつとした声で投げかけられた。表情一つ変えない比企谷くんは何を思っただけを言うのか。

その返答を待つ少しの瞬間が嫌に長く感じたのは私だけだろう。

「……。留学は、悪くないと思います。見聞を広めるに越したことはない」

「そう。だったら……」

「つて言うのは一般的な意見です」

「……貴方の意見を聞かせてちょうだい」

「……俺は」

それは黄色いお花のように。

それは小さな芽吹きのように。

それは甘い香りのように。

そつとー

「俺は…、陽乃さんに遠くへ行ってもらいたくありません」

混ざりつけない潤色の鮮やかさに囲まれる。

そんな子供染みた事を言うとは思わなかったから、私のや一色ちゃん、お母さんまでもが驚いてしまった。

「……ふ、ふふ。あははは！本当に、貴方は…ふふ。正直と言うか純粹と言うか…。陽乃や雪乃が入れ込む理由も分かるわね」

「お、お母さん！」

「あら、ごめんなさいね。…比企谷さん、陽乃は留学させません」

「…そう、ですか」

軽く頷いた比企谷くんは、息を少しだけ吐きながらコーヒーをテーブルに置く。

「それなら…、良かったです」

言葉少なく微笑む彼がとても印象的で。

隣でぶくぶくと泡立てていた一色ちゃんも何かを察したように静かに立ち上がった。

「はあ。本当に難攻不落です。それでは、私はお邪魔のようなので」

「あ？どこ行くんだよ？」

「結衣先輩ん家ですよー。今夜は雪ノ下先輩も呼んで、3人で慰め会を開くんです」

一色ちゃんは憎まれ口を叩きながらも店を出て行く。

彼女も彼に救われた1人。

痛いくらいに伝わる彼女の気持ちに、私はほんの少しだけ申し訳なく思う。

「好かれているのね。比企谷さんは」

「…利用されてるだけかもしれないかもしれませんが」

「分かっているクセに。いつか馬に蹴られても知らないわよ？…それじゃあ、私も席を外そうかしら」

「え？お、お母さん？」

着物の袖がテーブルに着かないよう、お母さんはゆつくりと席を立つたと思うと、比企谷くんに優しく微笑みかけた。

「陽乃をよろしくね」

「お、お母さん！」

「はいはい。それじゃあ、お先に」

背筋の伸びた後ろ姿。

微かに香るコスモスの匂いは、きつとお母さんが愛用する香水の物だろう。

「……」

「……」

急に訪れた2人きり。

とても冗談を言える空気ではないけども、気の利いた言葉は思い浮かばない。

そんな中で、彼は確かに語り出す。

「もつと、違うタイミングで言おうと思ってたんですが…」

ふわりと芽吹く季節の風はどこか冷たく、それでも彼の言葉はどんな物よりも暖かい。

揺れるコーヒーはとても甘そうだ。

「雪ノ下さん。四つ葉のクローバー、また探しに行きましょう」

「…ふふ。呼び方が戻ってる。四つ葉のクローバー、探し方教えてくれるの?」

「ええ、いくらでも。また、受け取ってくれますか?」

「え?」

「l l b e m i n e」

「っ！」

「…ちよつと、恥ずかしいですね。花言葉とか、クサかったですか？」

ぼつりぼつりと溢れる涙は止めどない。

彼にもらったクローバーは未だ部屋に飾られている。

幸せな印の象徴のように。

「い、いっぱい受け取るよ!!持ち切れなくらい!!比企谷くん!大好き!!」